

## 仏教教育・仏教保育の基底

大城 邦義

### 一 はじめに

仏教が人間存在のあり方を「生死」と押えるときに、その「生」のところに関わってくるのが「教育」であり、「死」という一点に関わってくるのが宗教としての仏教である。その意味では、教育が「生」から「死」へ $\wedge$ 生 $\downarrow$ 死 $\vee$ という方向で人間を見ているとすれば、仏教は逆に「死」から「生」へと $\wedge$ 生 $\uparrow$ 死 $\vee$ として人間を見ているということが出来る。そこで「仏教教育」なるものがどこで成り立ち得るのかと言えは、その「死」から「生」を見るとところに成り立つ。故に、言い換えるならば、「死」への「生」を生きている人間が、その「死」の一点をいかに解決しているかが問われているのであり、そこに立って「仏教教育」は、逆にその「死」への「生」を育むものである。 $\wedge$ 生 $\uparrow$ 死 $\vee$ という視座に立って、「死」への「生」を育む営みなのである。 $\wedge$ 生 $\uparrow$ 死 $\vee$ という眼をもつことによって、「死」に向かって在る私の「今」の「生」を問いつづける。その方向において「仏教教育」は成り立つのである。

故に、われわれの「生」は、「死」への「生」であるが、その「死」への「生」を生かし切るといふ地平を開いてくるもの、そこに実は「仏教教育」という言葉が内包している意味がある。それは又言い換えるならば、究極的に私たち自身「死」への「生」を超えるという一点が明らかになればこそ、その「死」への「生」を生き切ることができる自分

に成れるということである。

以上のように私は「宗教としての仏教」と「教育」との関係を基本的に見るのであるが、その意味では宗教としての仏教は、常に「今」の充実・「今日一日」の充実を開くものであり、その「今」という一点の充実性・充足性を問題にしてくるのである。即ち宗教としての「仏教」は、今日一日の充実に人間を立たせていくものであり、どこまでも「生（いのち）」の質を問題として人生の意味を明らかにしてくるものである。そこに立って初めて「教育」が「未来」・「明日」を開くものとして考えていくことができるのである。それが「仏教教育」であると考えてみる。

## 二 問われてあること

そこで基本的に先ず問題となってくることは、教育者・保育者自身の人間観である。教育・保育が、人間と人間の触れ合い、人格と人格の触れ合いにある以上、教育者・保育者がどういう人間観をもち、人生観・世界観を形成しているか、言い換えるならば、どのように人間を見、どのように人生を見、どのようにこの世界を見ているかが、根本的に問われている。教育環境・保育環境が種々問題にされ、取り沙汰されているが、最もわれわれが問題にしなければならない現実問題は、教育という場に身を置いている教育者・保育者自身なのである。その人間性、そこから生まれてくる人間としての生きる姿勢、更に人間への眼差しというものが最も重大な問題なのである。教育論が教師論と言われる所以である。

「仏教教育」の課題において最も問題になることは、教師像・保育者像である。根本的に教育の責任主体の問題として、教育者とは何か、保育者とは何か、その一点が問われている。教育する人間とはそもそも何なのか、人間が人間を教育するということはどういうことなのか、ということの問題にしなければならないのである。その意味では、教育者とは何か、保育者とは何か、を問題にすることは、そのまま私自身を問題にすることにほかならない。宗教としての仏

教は常に問いを発している。「今現在」の「私」を問うて来るからである。教育者・保育者は、常にこの今、自分の足下で、人間であるとはどういうことか、教育者とは何か、教育をするとはどういうことか、自分は何をしているのかが問われている。そのことに気づくとき、初めて「仏教教育」と言うことが許される。宗教としての仏教そのものが、人間そのものを問い、人間であることを問い、人生の意味・価値、そして人生観・世界観を問い、人間としての在り方をこの今の自分のこととして問いつめてきていることを見失ってはならない。

### 三 仏教保育者としての視座

教師と言うも、保育者と言うも、等しく基本的には子どもたちの「受け皿」としての位置を持つ。特に保育者はその対象年令から言っても、子どもの受け皿として子どもたちの中にある存在である。子どもたち一人一人の受け皿として一人一人を育み培う役割をなすものである。その意味で受容と共感ということが保育者の姿勢として大切にされており、そこから保育とは寄り添うことが基本であると言われる。

子どもの受け皿となり、子どものかげから見えないように寄り添いつつ見守り、子どもが身の回りのことを始めとして自分のことを自分でできるようになっていくことを待ちながら、人間として伝えるべきことを伝えていくところに「保育」という関わり方がある。故に、保育においては、子どもが正客なのである。「子どもが正客である」ということは、「子どもを正客にする」ということと直ちにイコールにはならない。「子どもを正客にする」という発想は、大人である保育者が中心にいて「子どもを正客に置く」ということである。一見「子どもを正客にする」ということも「子どもが正客である」ということも同じことであり、等しく子どもを中心としているように聞こえるが、「子どもを正客にする」という発想は既にその立場が大人に置かれている。「子どもが正客である」ということは、大人に立場が置かれているのではない。その一点に大人が眼を開くことが根本問題なのである。「子どもが正客である」という開眼は、大人が子ども

とともにある中で「無我」を知らされることである。大人自身が子どもに照らし出されてゆく中で「自我」中心の自分が転ぜられてゆき、「無我」の地平を味わわされてゆくことである。子どもの「生（いのち）」の営みの流れに参与するのだから、子どもを中心に行っていると言いつつ、結局大人の世界の都合に引っ張り込むことになる。保育者は「子ども中心」という言い方のもので、子どもたち自身の「生」の営みの流れを見失い、大人の世界に引っ張り込んではいはしないかをよく考えねばならない。日々の大人自身の人間としての在り方・価値観がそのまま子どもの世界に反映して、子どもたちの「生」の営みを苦しめていることに気づくことが、大人である保育者には求められている。仏教保育の視点は、大人たち自身にその人間としての在り方・価値観を問い、その根本的反省を迫っているところに、その特徴がある。

#### 四 仏教教育・仏教保育の基底

私が今この「仏教教育・仏教保育の基底」ということで確かめようとしていることは、現実問題として基本的に「教育」というものは一体誰のものかということである。私たちは、教師・保育者が生徒・子どもたちに教育を施すと考えている。そこには、教育者が被教育者に、或る自明性をもって関わっているということがある。子どもは未熟な存在で、大人は子どもに教える立場にあるという自明性である。しかし、それは一面的なことではないことを知らねばならない。そこに気づけないところから、多くの見失いと見過ちとが現実問題として出てきているのであるが、今はその基底において見失われている一点を明らかにしてみたい。

「教育」という事実を眼を開いて見ると、当前のことであるが、実は教育をしている者が教育を受けていて、教育を受けている者が実は教育を施しているという事実がある。そこに、教育関係の現実がある。

しかし、そのことは再応受け止め直してみると、「あなたも学ぶ者である、私も教えられ学ぶ者である、私もあなたも

共に教えられ学ぶ者である」ということで、一見対等で平等の人間関係が育まれ、「教育は共育である」と言われるような事実が生まれていて、理想的な教育の場が成り立っているように思われるが、問題は実にそこに潜んでいる。

それは何か。私たちは「学生に教えられた」、「生徒に教えられた」、「子どもに教えられた」と言う。その言葉は基本的に一見謙虚に教育関係というものを受け止めていて、教育者の手本であるような教師像というものが彷彿としてくるのであるが、しかしその「教えられた」という言葉は、そんなにたやすく使える言葉なのであろうか。人間が本当に「教えられる」ということは、実は存在自身に響き応えてくること、この存在に切り込まれ、食い込んでくることである。もっと言えばこの自分自身の立っている場が崩されていくことである。そこに実は「教えられた」と言える事実がある。私たちが日常平然と言っているその言葉の地平というものは、全部自分の「我見」の中で受け止められていることであり、「我見」に取り込まれたものとなっている。それは、あたかも子どもたち・生徒たちの声を聞いているかのごとく、自らも思い込み、他にもそのように思わせているだけなのである。それは一種の自己韜晦と自己陶醉に陥っているとも言えるし、ポーズとも言える。その意味では、本当に教師という人間が自己自身を問うことは、難中至難なのである。本当に子どもに「教えられた」という言葉は、教師が自分の自己中心性に気づき、子どもの前で土下座せずにはおれないような自分が見えたとき、初めて使えるのである。無条件に子どもの前に頭が下がる、頭を下げるより他ない自分（自己中心性）が見えていなければ、先に述べた「私もあなたも共に教えられ学ぶものである」という姿勢は本当はその人の中で根付いて生きられていない。

その意味では、教育の場が本当に「共育」の場となり、子どもも大人も「人間である」という領きのもとに人間として育ち合い、人間として学ぶことになるかどうかの本質が問われている。

## 五 親鸞の人間観

親鸞の「生」のすがたを蓮如は次のように確かめている。

「故聖人のおおせには、親鸞は弟子一人ももたずとこそ、おおせられそうらいつれ。そのゆえは、如来の教法を、十方衆生に説ききかしむるときは、ただ如来の御代官をもうしつるばかりなり。さらに親鸞めずらしき法をもひろめず、如来の教法をわれも信じ、ひとにもおしえきかしむるばかりなり。そのほかは、なにをおしえて弟子といわんぞ、とおおせられつるなり。されば、とも同行なるべきものなり。これによりて、聖人は御同朋・御同行とこそかしくきておおせられけり」（蓮如『御文』1・1）

特にここで注意させられるのは、「かしくきておおせられけり」という言葉である。「親鸞聖人は私たちのことを御同朋・御同行とかしずいて呼んで下さっている」と蓮如は受け止めているのである。ここに「如来」を教える者というよりも「如来」の教えに生きる者としての親鸞のすがたを確かめた蓮如の眼の確かさがある。そして私はここに「弟子一人ももたず」という親鸞の「南無」のすがたを見る。「如来」に南無する者は、実は「如来」の南無を生きるばかりであり、「十方衆生」に「御同朋御同行とかしずく」人なのである。すなわち、人間として生まれ、人間として大切なこととして気づかなければならないことに気づかしめるのが人間の教育に関わる教育者という存在であるが、それは親鸞においてはただ「如来」という一点であり、その「如来」を伝えようとしていくとき「ただ如来の御代官をもうしつるばかりなり」と言い、如来が主なればこそ自分はその代行であるというのである。自分が頂いている教えをそのまま人に語るだけであるから、「親鸞は弟子一人ももたず」という言葉が出てくる。そこにおいて蓮如は教えを伝える者のあり方を確かめているのである。

その意味では、親鸞の生活の上に現われた本質的にしてかつ具体的な「南無」のすがたをこそ「親鸞は弟子一人もも

たず」という言葉は語っている。それを、仏教教育・仏教保育の基底の唯一点として、私は親鸞の中に見る。

『歎異抄』ではその親鸞の「南無」のすがたを、「愚」という一点を静かにあぶり出すように語っている。『歎異抄』は「ひそかに愚案を廻らしてはほ古今を勘うるに」という言葉で始まっているが、その「愚案」という言葉は「自分の愚かな考え」という意味ではない。その「愚」の一字は、実に『歎異抄』全編を踏まえた上で聞き取るとき、『歎異抄』の各条を貫いて「如来」の前に静かに頭を垂れている親鸞と共にある著者の「南無」のすがたを表わしている。故に『歎異抄』は、最後に師親鸞自身がどこで人間であることを確かめているかという一点を示すように、「流罪以後、愚禿親鸞と書かしめたもうなり」という言葉で終っていく。「親鸞は人間であることを自ら愚禿という一点で確かめている。私は人間であることを愚という一点として親鸞によって教えられた」と表白しているのが『歎異抄』の著者の心根である。それが「如来」を知る人の人間観である。「如来」を知ることとはすなわち自身を「愚」として発見することであり、それが仏教教育・仏教保育の基底となる人間観なのである。

## 六 仏教保育者の基本姿勢

既に述べたように、基本的に教育という関係においては、幼児を対象とするか、児童を対象とするか、青少年を対象とするか、その対象とする人たち、関わる人たちは異なっても、教育とは、それらの人たちの「受け皿」となることである。看護・介護においてもそのことは同じである。広く人間教育に関わる仕事に、基本的に求められる在り方は、その人たちの「受け皿」になることであり、「受け皿」であり続けることである。それは、子どもによっておのずから親とされるように、保育者・教育者となるということは、おのずから子どもたちの「受け皿」とならしめられていくのであるが、そこで保育者が、自分を「受け皿」として在ることを見出し、初めて「子どもが正客である」ということが見えてくる。その「受け皿」として在るということは、何も完全無欠な人間でなければならないということでは

ない。関係存在である人間が、自己自身の存在位置に気づくことである。故に、むしろ子どもにとって自分は不完全な人間であるけれども、否不完全な人間であればこそ不十分なながらも受け皿として全力を尽くすという姿勢も生まれてくるのである。要は姿勢の問題である。

故に、そこにおのずから気づかしめられてくることとして、自己自身が子どもにとっての「鏡」として在るという意味がでてくる。「鏡」とは、ものをよく照らし出すということであるが、又「鏡」は強制しないということでもある。「鏡」は、ものをありのままに映し出すだけなのである。注文を付けたり、押し付けたりしない。ただ映し出すだけである。美も醜も選ぶことなく映し出す。それが鏡の「無自性」性である。「無自性」とは「無」を自性とするということである。鏡自体が美醜を超えているから美も醜も映し出すことができるのである。鏡自体が美でも醜でもない、美や醜は鏡自体にはない。鏡は正直にものを映し出しているだけなのである。

なぜ教育者・保育者を「鏡」に譬えることができるのかといえ、先に述べた「子どもを正客にする」のではなく「子どもが正客である」ことを映し出すことができるのが「鏡」だからである。

一般に教育に関わる者は、相手の子どもに対して何かしなければならぬと考えがちである。その種の思い込みがある。故に、子どもに対してよかれと思っていることが、案外子どもの邪魔をしていることに気付けないということがある。故に、保育者が、保育という場において「鏡」であるということが、非常に重要な意味をもつ。「鏡」であるということとは、子どもの手本であるとか見本であるとかいうことではない。ただ映し出すという位置とその意味をいうのである。保育者は子どもを映し出すことができればよい。

では「鏡」に譬えられる保育者は何をすればよいのか。「鏡」は「鏡」であることを失わないように、すなわち映し出すという働きを曇らせないように、自分自身を磨くことである。曇ってしまったら「鏡」ではない。曇ってしまった「鏡」はその「無自性」性を失ったわけで、自らの存在位置と意味を失ったところから、かえって子どもの邪魔をすることに



なる。子どもにとっての鏡であるということは、子どもを常に映し出していくという役割であり、働きである。その中で、子どもが自分で気付いていく姿勢が生まれることが大切である。

私たちが受けてきた教育を振り返ってみたとき、上からも横からも他によって強制され追い立てられて受けてきた教育がほとんどであるが、その中において自分で自分に気付いていくということが、人間としての成長・自立においては、根本の課題として問われている。教育云々というが、人間は他との関係において自分で自分に気付いていくことによって成長し自立していくのである。他者である大人が子どもを変えようとして関わるところに強制が働くのであるが、それは広い意味で「暴力」というべきであろう。子どもが自分で自分の課題に気付き、自分でハードルを越えていくことが、子どもが育っていくということである。そのとき、教育者・保育者は「縁」として子どもの近くにいるのであって、子どもの邪魔をしていないかどうかという一点が常に問われていることを自己自身に問いつつ、人間として子どもと同等の資格であることを踏まえて、具体的に年齢に応じて関わっていくことが大切なのである。

故に、「鏡」にたとえられる教育者・保育者というものは、人間として人間であることを問い、自己自身を磨くことによって、初めて子どもたちにとっての「鏡」という縁となり得る。

## 七 「教え」の前に立つ

そのとき、教育者・保育者も、子どもたちが「鏡」であることに気づいていく。自分の回りすべてが「鏡」であることに気づかされる。自分の身の回りに起こるすべてのことが自分自身を映し出していることに気づく。

そこに立つことによって、教育者・保育者自身も「鏡」としての自己自身を磨いていくことができる。現実の人間関係の中で、様々な環境の中で、教育者としての存在が照らし出されていく。

しかし、その具体的現実のすべてのことを、自分を照らし出してくるものとして受け止める眼はどこで開かれるので

あろうか。先に、子どもが正客であることに気づくこと、「如来」を知ること、即ち「愚」の一点に気づくことを述べたが、そのためにはそのことに気づかしめる「教え」の前に立つことこそ根本であると考ええる。「教え」とは教義でも教条でもない。ただ一人一人の人間、私自身をありのままに照らし出し、その「相対有限」なることに気づかしめ、一人一人をかけがえのない存在として立て、一人一人に生存の位置と意味を開いてくるものである。既に述べたように、私は親鸞の人間観に仏教教育・仏教保育の人間観の基底を見るのであるが、「教え」となるものは親鸞或いは『歎異抄』に限らない。ただ一人一人に相対有限なることに気づかしめる有縁の教えの必要性を思うのみである。その意味で、私においては『歎異抄』が「鏡」の前に立っている人間の言葉で綴られているということが言えるのである。すなわち「如来」という「鏡」の前に立った人間の言葉、それが『歎異抄』の言葉なのである。言い換えれば、「如来」という「鏡」によって照らし出された人間の言葉だと言いうことができる。

『歎異抄』の言葉が、「鏡」によって照らし出された人の言葉であるということは、その言葉の響きが透明であり、その語り掛けが、一貫して人間に条件を付けないということがある。○○でなければ「人間」ではないとか、人間はかくあらねばならないというような注文・条件を一切付けない。注文・条件を付けるのは人間の眼であり、人間の世界である。しかし『歎異抄』の眼差しは、その人間の見方に対して、「いかなる人間も等しく人間として生かされている。ただ、あなたは人間としてそれでよいか」一人一人に語り掛けてやまない。一貫して「人間よ」と一人に語りかけてくるところに『歎異抄』の言葉がある。そこに平等に「人間」を見詰めている眼差しがある。

## 八 歎 異

思えば、その「歎異」という言葉が、教育・保育の原点を表わす言葉である。「異」とは人間業を表わす。人間はその生活習慣の異なりによってそれぞれ異なった文化を生み、異なった世界に生きている。異なった一人一人の人間が異な

った生を営み、一人として同じ人間はいない。人間の各別性を表わしているのが「異」という一字である。その各別性・個性故に、人と人は摩擦を起こし、ぶつかり合い、対立し、様々な問題を引き起こしているのが現実である。しかし、業の異なりによる、発想・考え方の異なり等、種々様々な異なりの事実を、決して裁かないというのが、この「歎異」という言葉の意味である。

私たちは「異」なるものに対して「排異」する。あるいはその「異」なるものに対して「改めよ」と「改異」という迫り方をする。あるいはその両者のどちらでもないときは妥協か黙認する。それが人間の関わり方である。しかし、それに対して「歎異」という関わり方は、それらの全てに選ぶ。「排異」でも「改異」でも「妥協」でも「黙認」でもない。その意味では、「歎異」とは、「如来」の前に立って、この現実を起こってくるものの全てを自分のこととして受け止めている謙虚で静かな自信である。自分の課題として引き受けていく姿勢である。

即ち、『歎異抄』の言葉は、実にその著者自身が聞いている言葉なのである。「聞」の言葉というべきか、著者自身が自分の存在に響かせて聞いている言葉なのである。

故に、『歎異抄』の言葉は、人間が本来人間として人間と触れ合う、人格が人格と触れ合う、人間が人間と出会うのはどこで可能なのか、ということをし、読む者一人一人に問いかけている。私たちは共感という言葉や言葉を日常的によく使うが、『歎異抄』の言葉を聞いていると、その共感という言葉の甘さ、曖昧さ、安易さを思わずにはおれない。「歎異」の響きは、単なる共感ではない。「悲心」の響感と言うべきであろう。そしてその「悲心」の響感とは、実は「如来の大悲」から来ている。

「弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず」と言われるとき、そこには人間の眼差しを超えた眼が光っていることに気づく。人間は老少善悪を選ぶのが常である。「老少善悪のひとをえらばれず」という「弥陀の本願」はすべての人を映し出す「鏡」である。善人だけを映すのではない。若者だけを映すでもない。あるいは男だけを映すというので

もない。あらゆる人間を映し出す、普遍的な真理の「鏡」なのである。それを「如来」というのである。

「私」という人間が、「如来」という鏡によって照らし出されていることに気づくということは、無条件に許されて生きている、生かされて生きていることに気づくことである。そのことに気づいたならば、他の人も、無条件に許され、生かされていることに気づく。「宗教としての仏教」はただその一点を人間に開いてくるのである。

## 九 教育方法・保育方法

では、「鏡」に譬えられる教育者・保育者の教育方法・保育方法は具体的にどのような在り方になってくるのであろうか。具体的年齢に応じて関わっていくところに教育方法・保育方法も課題となってくるのであるが、たとえば清沢満之は青年教育においてソクラテスの教育方法を高く評価し、問答の手段によることと、自家無一物の態度をとること、問題を日常卑近のことに寓することの三点をあげていることに注意せしめられる。『清沢満之全集』6）なぜなら、問答の手段によるということも、自家無一物の態度をとることという点も、問題を日常卑近のことに寓することという点も、すべて既に述べてきたところの「鏡」の働きだからである。それは、教育者・保育者が子どもと同等の資格にあるということ、開眼・自覚において言えることである。「鏡」は自らを主張しないで回りの子どもたちを映し出すだけであるから、答えを強要したり注入したりしない。たとえ教師の側に多くの経験知識の蓄積があっても、常に無一物の白紙の状態で日常卑近の事柄に合わせて子どもの素朴な問いに耳を傾けるのである。そこで、子どもと共に考え、子どもは子ども自身の手で答えを見出し、教師は自明とされている答えに新たな光を当てられることにもなる。「無一物の教師」と「無邪気の弟子」とが、常に照らし合い、響き合い、磨き合う関係を開くところに、「受け皿」「鏡」としての教育者・保育者の教育方法・保育方法基本姿勢が求められている。その基本姿勢の上に立って、更に具体的な教育方法・保育方法が見開かれねばならない。